あとがき

渺々とした大古の姿、争乱に明け暮れた吉野朝時代と山岳武士、藩政における百姓の生活、これにふれてみたいと念じたものは決して私一人ではないと考えます。大豊の地に生れ、そしてこの地に還る者の偽らざる心情ではないでしょうか。

迫るような自然の中で山を拓き、斜面にへばりついた生活は大豊の住民一人一人の表情に、性格に、行為に、四国山脈の脊梁山脈と対峙して来た一千数百年の歴史から生れた一種の厳しさをもっております。その厳しさは今尚一万三千人の大豊町民に引つがれ、更に子孫に伝えられようとしております。

ところで大豊の地に人口が急激に増加し、山峡に人々の声がこだまし、開拓が進んだのは山内氏治政に入って以後であります。幾百年も山間のきびしい条件の中で生き抜いて来た兵は強く、一領具足と呼ばれた兵農分離以前の武士が山内氏入国に示した強い反抗は充分に新国主山内氏を驚愕させるものがありました。この為山内氏は巧妙な懐柔策と威圧を以って彼等に臨み、その所産として生れたのが新田開発と郷士制度の採用であります。

この結果大豊の地に郷士職が定着すると共に耕地、人口が急速に増加しました。長宗我部時代僅か三千六百石、人口四、五〇〇人であったものが、百五十年後の江戸中期には一万二千二百石、人口一万三千余人に達しております。

しかし長い歴史を通じてみじめなのは百姓の生活でありました。一領具足の者達は郷士として在郷地主となり一応安定した生活を送ることができましたが、多くの百姓達は御蔵米や知行主への上納米を稼ぐ一道具として遇せられたに過ぎませんでした。今日の常識からは想像もできぬ生活が彼等に強要されて来ました。しかしこれに堪えぬき、生き抜いて来たことによって今日の大豊の地があり、私達が存在するのであります。不滅の生命力、それはその儘私達

に承け継がれていることを信じたいのです。

さて大豊の文化の第一は巫覡文化の伝来であります。一千二百年の古、京師の巫覡が大豊の地に配流されたことを契機として大豊の地は、この時代創建された豊楽寺、定福寺と共に仏教文化の恩恵に浴し、急速な農耕技術の発展をもたらしたと云えましょう。この事について故西村自登先生は多くの考証を挙げ、大胆にこれを肯定しております。

第二は平家の落人による京都文化の流入であります。口碑、伝説とは云い条、今尚残る平家文化の伝承を私共は大切にしたいのです。それはとも角、大豊の文化は国府文化とは直接の関連はなく、巫覡文化、平家の落人による京師文化の直接影響をうけたと謂えるのであります。故に方言に風習に、王朝時代の遺風尚残り、中村文化の栄えた幡多地方と一脈相通ずるものがあるのであります。

しかしその後七百年、阿波小笠原氏の入土以来その領地として、長宗我部、山内氏と主は変れども一般百姓には何等進展もなく、明治維新を迎えるに至りました。

本編は故西村自登先生の遺稿によるオーソドックスな歴史に加え、下積みの生活に甘んじて雑草の如く今日に生き抜いて来たたくましい庶民の生活、それにスポットライトをあてるべく努力した結集であります。

勿論その意とする所を充分あらわし得なかった事は私共非才の故であることを御許し願い、改めてこの町史が未来につづく大豊の発展のために何等かの糧となることを信じて止みません。

編纂にあたり諸家の著書、資料をはじめたくさんの先輩、知己の御指導御助言を頂きましたことを誌上をかり衷心より感謝と敬意の念を捧げる次第であります。

昭和四十九年三月

町史編纂委員会

事務局長　渡辺盛男

参考並に引用文献　資料

高知県史（高知県）
土佐藩　（平尾道雄著）
長宗我部地検帳
天坪村史（溝淵忠宏著）
西峰三谷家古文書（県立図書館）
南路志
土佐物語
土佐農民一揆史考（平尾道雄著）
高知県の歴史（市民新書）
東豊永小史（松高明輝著）
長宗我部元親（山本　大著）
四国山脈（毎日新聞社）
安田文化史（安芸郡安田町）
奈半利町史（同　奈半利町）
嶺北史蹟（豊永雄喜他著）
高知県農地改革史（高知県）
日本の歴史（読売新聞社）
土佐美術史（山本　淳著）
四国資料集（人物往来社編）

高知県の文化財（前田和男著）
西峰の流れ（山本駿次郎著）
三名村史（徳島県山城町）

大豊町史編纂委員会事務局

編纂委員長	都築建康
〃副委員長	石原正恒
〃委員	小笠原美身
〃 〃	小笠原四郎
〃 〃	高橋俊郎
執筆者	故西村自登
〃 〃	橋詰延寿
事務局長	渡辺盛男
主任	中西盛興
顧問	門田盛一郎
〃 〃	寺石由雄

大豊町史

発行　昭和49年3月31日

編集者　大豊町史編纂委員会

発行者　大豊町教育委員会

印刷所　第一法規出版株式会社

107 東京都港区南青山2の1の17

四国支社　760 高松市天神前4番33号